

中長期目標 (学校ビジョン)	自己の生き方を探求していく人の育成 ～ 未来を生き抜く力を育むことを通して ～	今年度の 重点目標	1. 一人一人に応じた主体的な学びを実現する授業や教育活動の推進 2. 安心・安全、信頼される学校体制の構築 3. 分担と協働、意識改革による学校運営
-------------------	--------------------------------------------	--------------	-----------------------------------------------------------------------------------

年 度 当 初				評 価 結 果 ( 2 ) 月					
評価項目	各部	各課	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
一人一人に応じた主体的な学びを実現する授業や教育活動の推進		幼・小学部	夢を実現するために、学ぶこと、人と関わることが大好きな子を育てるための学習環境づくり	○教職員アンケート結果から、「将来の姿をさらに具体化し授業づくりをしたり、保護者と話をしたりしたい」という意見が多かった。 ○昨年度作成したキャリア教育系統表を基に図式化したり、進路が実施する計画に保護者と参加したりする等して、幼児児童の「将来」について考えを深めていく必要がある。	○幼児児童の未来(夢の実現)に必要な力を明確にした上で、学習環境づくりを行ったり、保護者と話をしたりしている。	○教職員が幼児児童の卒業後までについて考えることができるよう、主に進路指導課等と協働しながら学部研修を行う。 ○中・高等部の学習や現場実習の様子を参観することにより、幼・小学部の段階でつけるべき力について明確にする。 ○ねらいや意図を明確にした授業づくりや教室環境整備に努める。 ○週に1回、学習グループで授業等の検討をする際に、将来の姿等を話題にする。 ○保護者と将来について話をする際には、現在の状況や学習のねらい等を根拠をもって説明する。	○教職員が幼児児童の卒業後までについて考えることができるように、学部研修を行った。 ○幼児児童の将来をイメージしながら関わり方や環境調整の在り方を意識して学習等を進めることができた。 ○教職員アンケートでは、「幼児児童の未来に必要な力を明確にした上で、環境づくりを行ったり、保護者と話をしたりすることができたか。」の問いに対し、肯定的評価が90%であった。 ○保護者や子どもたちに対し進路に関わる情報提供を十分に行うことができなかった。	A	○未来(進路)について語る機会を継続し、未来につながる力の育成を目指す。 ○未来の姿を具体的にイメージするために、他学部の授業等を参観する時間を設けるなど、校内の連携強化を図る。 ○未来につながる情報を確実に伝えられるように、福祉サービス等について理解する場を設ける。
			生徒が達成感を感じ、学んだことを「～したい」という思いにつなげられる授業づくり	○昨年度、定期的に学習グループの会を設定し、個別の指導計画をもとに、年計の見直しや目標の再確認・共有を行い有効であった。 ○生徒と教職員のやり取りが増えた反面、生徒の主体的な学びの機会を抑制することもあった。より生徒の主体性を大切に学習を考えていく必要がある。	○関わり合いのある学習を通して、生徒が「～したい」という思いを抱ける授業づくりをしている。	○学習グループでの個別の指導計画ファイルを活用した会と、目標設定・授業計画・改善の会を定期的に設定し、職員間で目標や取り組みの共有を図る。 ○月に1～2回は学習グループごとに授業を決めて主体性を大切に授業づくりについて、実態把握から授業改善までの検討や共通理解をする時間を設ける。 ○生徒に対し、学習アンケートを年2回(前期・後期)実施し、授業づくりにフィードバックする。	○前期の取り組みの振り返りと来年度につなげるための方策を検討する時間を設定し、共通理解を図った。また、学習グループの会を定期的にもてるように学部会などの時間を調整した。 ○教職員アンケートでは、「関わり合いのある学習を通して、生徒が「～したい」という思いを抱ける授業づくりに取り組めたか」の問いに対し、肯定的評価が100%であった。 ○生徒対象の学習アンケートと担任を中心に生徒の様子から評価を行った結果、生徒全員が学習の中で「わかった」と感じ、学習したことを「またやってみよう」と感じている姿が見られたことを共有し合った。	A	○チームとして生徒の教育にあたるように、学習グループの会の時間を確保し、情報の共有や検討できる時間を確保する。 ○授業作りや目指す教師の姿については、学習グループで検討し学部内で共有した内容を次年度に引き継ぎ、継続した取り組みになるようにしていく。
			生徒の主体的な学びを活用した、社会とつながり社会をよりよくする教育の実践	○昨年度、単一障がい学級、重複障がい学級Ⅰ型、Ⅱ型が、ポッチャやeスポーツで他の特別支援学校等と交流する機会を設けた。生徒のアンケートでは、6名中4名が社会をよりよくしているという気持ちをもっていた。 ○教職員アンケートでは、校外外に関わりを広げる活動する機会をもちたいという意見が多くあった。一方、普段の学びや関わりを大切に、将来につなげたいという意見もあった。	○生徒や教職員が「私たちは社会とつながっている」「私たちは社会に貢献している」と感じることができている。	○自立活動部と連携し、月に一回の学部研修の設定、授業公開・参観の推進を行い、自立活動や教科横断的な学びについての指導力向上を図る。 ○特別支援学校や高等学校等との交流及び共同学習を推進し、どの型も校外の方と関わる機会を設ける。 ○生徒との対話を重視し、生徒が主体的に社会をよりよくしようとする活動を設定する。 ○学部内の他の型や、他学部と生徒同士が関わる機会を設ける。 ○校外学習等の行き先や活動を開拓し、生徒の地域での活動の幅を広げる。	○定期的に学部研修を設け、個々の目標を明確にした学び、教科横断的な学び等について情報共有した。 ○新たに高等学校との交流及び共同学習を実施し、生徒全員が他校との交流を行った。より良くするには、目的の明確化や計画的な実施が必要である。 ○就労促進セミナー、公民館との交流等、生徒の主体的な社会参画を促す学習を設けた。 ○教職員アンケート及び学習アンケートでは、「社会とつながったり貢献したりしている」の問いに対し、教職員、生徒とも肯定的評価が100%であった。	A	○交流及び共同学習について、目的やめざす姿を教職員間はもちろん、生徒間でも明確にし、内容や方法の質を向上を図る。年間指導計画に位置づけ、計画的に事前学習や事後学習を行う。
			主体的な学びにあった教育課程の編成	○令和7年度から重複障がい学級の教育課程を変更することは周知しているが、何をどのような手順で検討するのか明確でない。	○幼児児童生徒一人一人に応じた主体的な学びにあった教育課程を編成している。	○課内で、編成する手順や日程、教育課程検討委員会で検討すること等を共有する。 ○教育課程検討委員会で方向性を示し、助言を受け検討事項を明確にする。 ○各学部ごとに何を検討するのか伝えるだけでなく、教育課程の編成に一人一人が関わっているという思いをもってもらえるような伝え方に努める。	○課内で、教育課程編成の手順や検討委員会での協議するのかの確認、検討委員会後の振り返り、学部ごとの話し合いの内容の共有を丁寧に行うことができた。 ○教職員アンケートでは「教育課程の編成に一人一人が関わっているという思いをもてるように行った研修は、学部で教育課程を検討する際に役立ったか」の問いに対し、肯定的評価が98%であった。 ○今年度は重複障がい学級の2つの類型を1つに統合し、医療的ケアの内容を教育的に捉え、自立活動の時間が充実するようにした。	A	○幼児児童生徒の学習評価等を把握し、編成した教育課程の評価・改善に生かす。

教務部	情報機器管理課	ICT機器の有効活用の推進	○教育活動や校務においてICTの活用は進んできた。フォルダ階層構造の再構築や使いやすい機器の整理整頓、保管場所の整備等環境整備も徐々に進んできている。データベースの運用開始し業務の効率化が進んだ。ICTを活用する上で必要なルールの整備がまだ必要な面がある。ICTに関する、相談に対して迅速、丁寧を行うことができている。	○教育活動、校務において環境整備（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステムの整備等）、情報発信、提案が行われ、ICT機器が有効活用されている。	○必要な時にいつでもスムーズに有効活用ができるような情報機器やデータの管理と整備を行う。 ○情報やICT端末等を扱う際の明確なルールづくりを行う。 ○ICT支援員と教職員を結び付けたり、ねらいを持った活用に努めたりすることで、ICTをより有効に活用できるようにする。 ○教育活動や校務の効率化につながる情報の発信を積極的に行う。 ○ICT活用に関する相談対応において、迅速、丁寧な対応を心がける。	○職員アンケートでは、「ICT機器を使用した教育活動・校務を不都合なく行えたか。」の問いに対し、肯定的評価が93%であった。 ○フォルダ階層構造の再構築やデータベースの改善を進めた。 ○使いやすい機器の整理整頓、保管場所の整備、各情報処理室の環境づくりを行った。 ○生徒用及び指導者用ICT端末等を扱う際の明確なルールづくりを進めた。 ○職員アンケートでは、「ICT機器を活用した教育活動・校務についての情報発信、提案はされていたか。」の問いに対し、肯定的評価が98%であった。 ○各分掌ごとに利用を勧める、効果的なアプリ等の紹介記事作成を行う等、ICT支援員の活用促進に努め、活用の幅が広がった。 ○ICT活用に関し、掲示板、研修、書籍の紹介などでの情報発信や提案を行った。 ○ICT活用に関する、相談に対して迅速、丁寧に対応した。	○教職員からのニーズの吸い上げ方の工夫し、ニーズにもとづいた取り組みを行う。 ○ICT支援員との連携をさらに高め、主に教育活動に関わる情報共有を充実させる。特に、教育活動におけるICT活用の実践事例等を収集し発信する。 ○情報処理実習室等の使いやすいレイアウト、端末等の機器の充実など環境整備をさらに進める。
	学校行事課	行事を通して人とのつながりを感じたり、もてる力を発揮したりできるような環境づくり	○アンケート結果より保護者に向けて本校の教育活動や障がい理解の啓発を意識して取り組むことが概ねできている。行事において、幼児児童生徒の能力を引き出す指導に専念できる環境づくりに努める必要がある。	○幼児児童生徒が、行事を通して人とのつながりを感じたり自分のもてる力を発揮したりできるような環境を整える。	○わくわく体験、芸術鑑賞教室では、五感に働きかける活動を設定するとともに、社会人講師と関わることで経験の拡充を図る。 ○わくわく体験、芸術鑑賞教室が単発の出来事として終わらないよう、事前事後学習の提案と掲示の活用を行う。 ○皆生スポレク祭、皆生・ブライト・フェスティバルでは、いろいろな人と触れ合う場面を意図的に設定する。 ○各行事の目標やねらいを明確にして、見直しをもって計画できるよう配慮する。	○わくわく体験と芸術鑑賞教室では、事前事後学習の提案と掲示の活用を行い、学習を深める環境を整えることができた。しかしながら、さまざまな行事が集中してしまったこともあり、慌たじさが目立った。 ○教職員アンケートでは、「皆生スポレク祭と皆生・ブライト・フェスティバルで、人とのつながりが感じられたか」の問いに対し、肯定的評価が94%であった。	○校内行事のバランスをみて、わくわく体験と芸術鑑賞教室の回数を検討する。 ○皆生スポレク祭では、学部の枠にとられない活動の導入とチームの「つながり・かかわり・協力し合うこと」をねらった企画をする。
	学習支援課	授業実践に活かせる相談、研修、通信の企画	○研修や自立活動通信から得た知識が、教職員の日々の実践につながり、授業に活かされている。昨年度までに扱った内容を継続して求める意見が多くある一方、認知学習や身体に関することについての要望も複数あり、取り上げて欲しい内容は多岐にわたる。また、優れた実践や工夫をしている教職員が多くいる中、情報提供の場が少ない。	○学習支援課への相談、研修や通信などにより得た知識や情報が、日々の実践に活かされている。	○教職員の要望を受けたり授業へ参加したりして得たニーズについて、分掌内での相談、検討、研修を行い、多くの要望に応えられるようにする。 ○身体の動きに関する研修会を企画する。（自立活動夏季研修会） ○校内の人材を活用した研修や通信への情報提供を通し、本校教職員の専門性の向上を図る。	○教職員アンケートでは、「学習支援課への相談、研修や通信などにより得た知識や情報が、日々の実践に活かされましたか。」の問いに対し、肯定的評価が96%であった。 ○自立活動夏季研修会を数年ぶりに開催できたことにより、身体へのアプローチをはじめ、情報交換やグループで指導にあたる機会を提供することができた。身体や姿勢についての要望は、依然として多くある。	○次年度に向けて知りたい情報や研修の内容についてのアンケート結果より、「身体・姿勢」「教材・器具」「摂食指導」「ICT活用」「障がいに関すること」「自立活動（目標・内容）」などのテーマがあがった。多岐にわたるため効果的な情報提供ができるよう、研修の日程や内容、開催方法を工夫する。 ○教材や器具、これまでの研修や実践の動画など、誰もが活用しやすい環境を整備する。
	自立活動部	授業づくり・研修課	自立活動の「流れ図」の授業づくりのツールとしての活用	○近年、授業力向上を目指して教科学習に力を入れていた。そのため、自立活動の研修の機会が少ない。 ○自立活動の「流れ図」を作成することを通して、個別の課題を整理したり学習目標を設定したりする経験が少ない。	○自立活動の「流れ図」を作成し、授業づくりに活かしている。	○校内研修を通して、「流れ図」の良さや作り方を知る。 ○「流れ図」を使って個別の課題を整理したり学習目標を設定したりする。 ○授業見学や授業ミーティングに一人一回以上参加できるように事前アンケートを実施し、日程調整を行う。	○教職員アンケートでは、「校内研修や授業づくり推進日の取り組みを通して、「流れ図」の作り方を知ることができましたか」の問いに対し、肯定的評価が84%であった。 ○昨年度末の反省事項を受け、「授業を見合う」ための仕組の改善に努めた。授業づくり推進グループの編成を学部を解いた縦割りグループから型別の学習グループに変更した。実態のよくわかるグループになり、話し合いが深まったという声がある一方で、授業見学のための日程調整は改善できなかった。

支援部	進路指導課	キャリア教育の推進と進路指導の充実	○キャリア教育や進路指導について情報収集する教職員が増えてきた。 ○昨年度、各学部のキャリア教育系統表の作成を基に各学部におけるキャリア教育について考えを深めた。今後は、将来の生活につなぐ取り組みを充実させていく必要がある。	○教職員が将来の生活と現在の取り組みとのつながりを意識しながら指導をしている。	○卒業生及び保護者や事業所の職員から、卒業後の生活で役立つ力や在学中に身に付けたい力について情報収集する。 ○月に一回は、研修、進路指導通信の発行や施設・事業所見学等とおして、キャリア教育の視点から将来の生活と現在の取り組みとのつながりを考える機会を設定する。 ○教職員アンケート等を活用し、将来の生活につなぐ取組状況について確認し、今後の取組に活かす。	○進路指導研修会や現場実習の機会を通じて、卒業生及び保護者や事業所の職員から、卒業後の生活で役立つ力や在学中に身に付けたい力について情報収集し、掲示板で周知したり、進路指導通信の作成に活かしたりした。 ○月に1回、研修やセミナーの開催、進路指導通信の発行やキャリア・パスポートの作成や活用を通して、将来の生活について情報を得たり、現在の取り組みと将来の生活とのつながりを考えたりする機会を設定した。 ○教職員アンケートでは、「将来の生活と現在の取り組みとのつながりを意識しながら指導ができてきているか。」の問いに対し、肯定的評価が98%であった。	A	○現在の取り組みと将来の生活とのつながりを考える機会を継続して設定する。 ○キャリア教育に関する取り組みや卒業後の生活に関する事例等、得た情報を掲示板や学部会等でリアルタイムに発信する。
	生徒指導課・教育相談課	自分らしい生き方を実現していくために必要な能力や態度を育てる教育の充実	○昨年度、個別の教育支援計画の様式や記載の仕方については整理をしたが、作成後の有効な活用にはまだ課題がある。	○教職員が、個別の教育支援計画を様々な場面で確認したり活用したりしている。	○個別の教育支援計画活用の場面（指導計画・授業計画の検討時、サービス担当者会、現場実習打合せ、学びの場の検討時等）や活用の仕方を適宜伝える。	○教務課と連携して呼びかけを行ったり、来年度の活用の手順に、個を語る会等での教育支援計画の確認を明記したりした。 ○教職員アンケートでは、「個別の教育支援計画を様々な場面で確認したり活用したりできているか」の問いに対し、肯定的評価が87%であった。	A	○教職員アンケートでは、まだ有効な活用ができていないという意見も上がっていた。今後も引き続き、活用の仕方等と呼びかけていく必要がある。
	インクルーシブ教育推進部	人権・福祉教育課	社会参画、自己実現につながる資質・能力の育成 人権感覚を高めるための取り組みの実施	○実態に応じて社会に参画する上で必要な資質・能力を育て人権意識を育てていく必要がある。 ○自己実現につながる主体的な実践行動を身に付けていく必要がある。 ○近年の社会情勢の変化を踏まえ、様々な人権課題や人権問題に対する職員の人権感覚を継続して高めていく必要がある。	○様々な集団の中で幼児児童生徒が活躍したり、思いや要求等を自己選択・自己決定をしたりするなど、人権が大切にされている経験や学習を重ねている。	○自己選択・自己決定の場を設定したり、個々が活躍する機会を設けたりする。 ○近年の社会情勢を踏まえたテーマで職員研修を実施する。 ○人権教育全体計画を教職員に周知し、学校教育全体で人権教育に対する意識を高め、教育実践につなげる。 ○育てたい資質・能力を年間を通して育成するため、年間指導計画の見直しや活用の仕方について検討する。	○教職員アンケートでは、「日々の学習や行事等で幼児児童生徒が活躍する機会や自己選択・自己決定する機会を設けて取り組んだか」の問いに対し肯定的評価が96%であった。合わせて子どもの意思表示を見逃さないようによく観察したり表出を待ちたりすること、個々に応じた表出に対応するための支援（選択肢の工夫、支援機器、言葉かけ）や言ってもいいと思える環境づくりにも努め、幼児児童生徒が活躍する経験や思いや要求を自己選択・自己決定する学習を積み重ねることができた。	A
安心・安全、信頼される学校体制の構築	保健安全部	保健指導課	主治医、学校医と学校との連携	○医療的ケア、医療情報について、主治医や学校医と連携を持ち、安全な医療的ケアや、的確なケアを行うことができている	○主治医、学校医と学校との連携が、确实、スムーズなものになっている。	○日常的に教職員や学校看護師と幼児児童生徒の様子やケアについて情報共有する。 ○主治医、学校医からの指導助言を、校内で共通理解して対応する。 ○評価については教職員にアンケートを実施する。	A	○これまでどおり、様々な方法で情報共有を図り、スムーズで確実な連携を図る。 ○教職員のニーズを整理し、養護教諭とのコミュニケーションはまだ十分ではないという意見もあった。
		給食指導課	「食育」についての啓発	○学校栄養職員の配置により、保護者、教職員への啓発がすすむようになってきている。 ○学校給食週間には、お世話になっている職員の方々に感謝状・プレゼント等で感謝の気持ちを伝えている。	○保護者・教職員が食育に関心をもっている。	○「食育だより」の定期的な発行を行い、保護者に正しい知識や関心をもってもらえる。また、掲示することで、教職員や幼児児童生徒も目にするようにする。 ○各学部の学習等での学校栄養職員の活用を促す。 ○評価については保護者・教職員にアンケートを実施する。	A	○保護者、教職員アンケートでは、「食育だより」の発行、掲示により、食育への関心が高まったとの肯定的評価は87%だった。 ○「学校給食週間」では、米子市の白ネギキャラクター・ヨネギーズの着ぐるみを利用して関心を高め、食育や地産地消への啓発を図りながら感謝の気持ちを表すことができた。
		安全教育課	危機管理の徹底と、研修や訓練の充実	○本校の危機管理を理解し、安全、迅速に対応できるようになることは必須である。 ○学校の危機管理の取り組みだけでなく、地域防災への保護者の関心を高めていく必要がある。	○教職員が、危機管理対応について理解し、イメージできている。 ○危機管理、対応について、保護者が関心をもっている。	○避難訓練（火災、地震、津波）を実施し、振り返ることにより改善を図る。 ○保護者に、訓練参加していただく機会を持ったり（地震、津波時の引き渡し訓練）、関連する情報を発信したりする。 ○評価については保護者・教職員にアンケートを実施する。	B	○訓練を通して、避難行動等の改善点が明確になってきた。より安全で、より迅速で、より確実にイメージして行動ができるように、来年度もマニュアルの見直し、改善を計っていきたい。 ○避難後の生活を想定し、避難所としての役割や機能を高める視点をもって、災害時への対応を保護者とともに整える。

分担と協働・意識改革による学校運営	インクルーシブ教育推進部	交流教育課	共生社会を意識した交流や社会参画の推進	○コロナ禍の数年間、感染症予防のため、外部との交流には制限がある時期が続いていた。現在は感染症予防は終息していないものの緩和傾向が進んでいる。	○教職員が「交流の理解が深まった」「交流の意義をふまえて活動することができた」等、肯定的な回答や感想を持つ。	○教職員が「交流しやすい環境が整うことができた」等、肯定的な回答や感想をもつ。	○共生社会を意識した交流活動を推進できるよう「インクルーシブ教育について」「何のために交流するのか」など交流の意義を教職員に説明し、意識を高めるようにする。 ○学部や分掌と密にコミュニケーションを取り協働体制を作るためのアイデアや方策などを検討したり、地域での交流を推進するために皆生交流マップ（仮）を作成したり、WECルームを整備したりするなど、交流しやすい環境を整える。	○教職員アンケートでは、「研修を受け、交流の意義をふまえて交流を行うことができましたか」の問いに対して、肯定的評価が98%であった。インクルーシブ教育についてや交流の意義などの研修を通して教職員に伝えていたことが実際の交流活動の中で生かされることができた。 ○教職員アンケートでは、「交流しやすい環境が整えられていたと思いますか」の問いに対して、肯定的評価が98%であった。交流で活用されることが多い機器管理、使い方の研修、実際に使っている様子を伝えたりなど人と関わったり、つながりすることができるeスポーツや視線入力等の学習の場となるWECルームの基盤を作り、交流活動に生かしてもらうことができた。	A	○今年度の取組を振り返り、本校の幼児・児童・生徒が様々な人と関われるような交流活動、社会参加を推進する。 ○共生社会を意識した交流活動を推進できるよう教職員に向けた研修を今後も行っていく。 ○交流しやすい環境を整えるためのICT機器の活用について、自立活動部や情報機器管理部などと分掌を横断的な協力体制作りを行う。
	総務部	総務課	業務の分担と協働等による業務改善	○学級減等による職員数の減少により、従来の学部毎の職員配置を踏まえた分掌体制が取りにくくなり、学部・分掌等の枠を超えた連携による業務の分担・協働がより必要になってきている状況がある。	○各学部・分掌において、業務の分担と協働・連携に取り組んでいる。	○分掌における部（課）の再編を踏まえながら、各学部・部（課）内や分掌間等での連携をより密にし、業務の分担・協働に取り組む。 ○企画委員会、運営委員会等での事案提案の際等に、各学部、部（課）内での事案検討・確認をより図り、チームでの取組を推進する。 ○評価について、教職員アンケート等を実施する。	○教職員アンケートでは、「業務の分担や協働・連携をしながら業務に取り組めたか」の問いに対し、肯定的評価が各部（学部・事務）では89%、各分掌（教科含む）では87%であった。 ○各学部、分掌共に業務の分担、協働・連携の仕方を工夫したり、学部・分掌間での連携を図ったりして取り組めたが、個々の業務の中では、平準化が十分ではない場合があったり、分掌体制の変更で個によっては業務が増えている場合などがあり、今後の課題である。	A	○本年度行った分掌再編における体制について、各分掌における業務内容の整理や業務の平準化、分担・連携等の視点で必要に応じて見直しを行い、改善を図る。	
その他	事務部	教育資源及び環境の適切な整備	○特色ある教育活動の支援、施設・設備の老朽化による修繕の必要性または安心安全な教育環境の整備のため、中長期な計画が必要である。	○主体的な学びの実現のために必要な教育資源（人・もの・金）を効果的に調整・調達する。 ○安心・安全な教育環境となるよう施設・設備・教具の整備及び維持・管理を行う。	○予算状況について複数で執行管理し、教職員へ定期的に情報提供を行い、早期に事業効果が発揮されるよう計画的に執行する。 ○施設修繕については、教育委員会で策定された長寿命化計画に併せて、学校内で課題を整理し、優先順位をつけて予算要求する。	○予算執行状況について、事務室内で情報を共有し、担当者に確認しながら執行した。 ○9月末の予算執行状況を企画委員会で報告し、今後の執行予定について確認、協議した。 ○施設修繕について、優先順位をつけ7月に次年度の予算要求を行った。必要な修繕について、その都度協議し、優先順位をつけて対応した。	A	○予算執行について、必要性や費用対効果を考え執行する。特に事業ごとの予算について担当者で確認しながら計画的に執行する。 ○施設修繕については、教育委員会で策定された長寿命化計画に併せて、学校内で課題を整理し、優先順位をつけて予算要求する。緊急修繕等についても優先順位をつけ迅速に対応する。		

評価基準 A：十分達成[100~80%] B：概ね達成[80~60%程度] C：変化の兆し[60~40%程度] D：まだ不十分[40~30%程度] E：目標・方策の見直し[30%以下]